
ポケットモンスターライトニング（仮）

マスタード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターライトニング（仮）

【Nコード】

N9653Q

【作者名】

マスタード

【あらすじ】

目が覚めたら、むさいおっさんがいた。

なに？俺死んじやったの？こんな自称神のおっさんに殺された？

うーん……過ぎたことはしかたない。

なんか、チート能力をくれて転生してくれるみたいだし、こいつを殺るのはまた今度にしよう。

え？転生先の世界はポケモン？

うーむ……どうやって過ごそうかな……まあ、考えるだけ無駄か。

せいぜい第二の人生を適当に楽しむとするか！

これは作者の処女作です。

ど素人が趣味で書いたもので、クオリティは非常に低いことを
あらかじめご了承ください > m (—) m < .

第0話 プロローグ！（前書き）

処女作っす！

ポケモンの他に東方も書いておりますが、まだプロローグどまり……
東方が詰んだら、ポケモンに。ポケモンが詰んだら東方を書きます。
え？両方詰んだらどうすんだって？

……どうしょ？

第0話 プロローグ！

—— お……きろ。

どこからか声が聞こえる……。
低くて野太い声が……

—— 失礼なこと考えてんじゃねーぞ。

地獄に送んぞ。

さっさと目覚ませや。

なんだよ……こっちは五月病でだるいんだよ……もう少し寝かせてくれよ

—— まだ2月だろ！！新アニメすら始まってないわ！！！

うつせーな……。

母ちゃん今日はGW略してゴールデンウィークだぜい。
ったくおつちよこちよいなんだから〜

—— ブチッ

—— 誰がてめえの母ちゃんだあああああ！！まだ桜すら咲いてねー季節だ！！！！

略してるところか文字数増えてんだろぅが！！！！逆だ！逆！！！！

「んだよ。逆ギレですかい？これだからゆとりは……」

—— てめえのせいだろおおおおお！！！！

なんでもかんでもゆとりゆとりって、バカにしてんじゃないぞおおおおお！！！！

閑話休題

「ここは神界で死と生の境目の場所で……俺は元の世界では交通事故で死んだ。こういうことか？」

「ああ……そのとおりだ（やっと本題に入れたぜ……）」

通りで辺り一面が真っ白ってわけだ。

俺と目の前にいる暑苦しいがたいのいいおっさん以外はなにもない。無という言葉がこれ程似合う景色はそうもないだろう。

にしても……ここに来る前の記憶が思い出せないなんてな。

他のことならばうちし覚えているのに。

「んで？あんたは神様なのか？死んだ俺を二次元の世界に転生でもしてくれんの？」

「お？やけに勘がいいな。俺の名はアポロンだ。名前くらいは下界で聞いたことがあるんじゃないのか？」

え……こんなマッチョなおやじがあのに2神の一人なのか？
……他の神もこんなむさ苦しい容姿ばかりいるのだろうか……会い
たくねえな。

「お前……さつきからとことん失礼なことばかり考えてやがんな。
俺はおっさんではない。お兄さんだ」

「俺の心が読めるのかよ」

「当たり前だ。神にできないことはあんまりないんだぞ」

そこは見栄を張ってでも、ないって言い切れよ。

「転生ってことはチート能力でもくれるんか？」

「とことん察しが良い奴だな。お前さんには3つの特典を与えるこ
とになっている」

それって少ないのか多いいのやら。

「多い方だぞ。お前が生を終えるのは本当はもっと先の未来のこと
だったんだからな」

また心を読みやがったな。
喋るのが省けるから楽でいいけど。

「……ちょっと待て。それはどういうことだ？」

ならなんで俺は死んじまったんだよ。
まさかとは思うが……こいつ。

「いやー……この頃面白い事が起こなくてよ……あんまりにも
退屈だから、誰か適当な人間に隕石を落としてみたら、物の見事に
お前に当たっちゃまってさ……」……言いたいことはそれだけか？」
……………あの………なにかお気に障られることでも？」

急に弱腰になるクソ神。

ってことはなんだ？俺はこいつの暇つぶしのために死んだってこと
か？

「そうなりますね」

俺はもう元の世界に戻れないんだよな？

「……………そうなりますね」

「遺言は？」

「最後に……………リリカルなのはのフェイトと結婚したか「死にさ
らせー……………!!!!!!」うぎやあああああ
あああああああああああああああああああ」

このシーンは削除されました

「俺はどこの世界に転生するんだ？」

「……………ふおおえほんのふえはいでふ（訳 ポケモンの世界です）」

顔面はボコボコに腫れ、服はズタボロになった正座状態のアポロンを見下ろす俺。

人間より腰が低い神ってどうよ。

「ポケモンだと？ポケットモンスター縮めてポケモン。ポケモンすなわちポケットモンスターっっー生き物がいる世界に行けと？」

「やたら説明的だな……………そんな新聞紙を上から読んでも新聞紙。下から読んでも新聞紙風に言わんでもいいだろ」

いつの間にか、俺が殴ってつけた痕や服の切れ目がなくなっていた神。

正座の体制から立ち上がり俺を見据える。

「ではお前さんの願いを三つだけ叶えてやろうではないか！」

叶えてくれんなら、元の世界にザオリクを唱えてほしいんだが…無理なんだろうなあ」

他の2次創作ではみんな無理だったもんな」

「んじゃ、まず一つ目。俺に『答えを出すもの』《アンサー・トーカー

『』の能力をくれ。ポケモンバトルの時じゃなくても、これがあると日常でも便利だからな」

アンサートーカーとは金色のガツシユのキャラ、デフオーが持つあらゆる疑問に答えを瞬時に出す一種の超能力みたいなものだ。

例えば、次の相手の攻撃はどうやったら避けられる？なんて、疑問の答えが頭にすぐ思い浮かぶ。

相手の行動がわかればどんなに強く範囲が大きい攻撃でも、避けられないもんはないからな。

ある意味無敵の能力だな。

ちなみに俺も作者も金色のガツシユが大好きです。

「ふむふむ……『答えを出すもの《アンサートーカー》』ね。二つ目は？」

答えを出すもの《アンサートーカー》だけでもう十分なんだが、このさい思う存分に好き放題言わせてもらおうとしよう。

「俺が捕まえたポケモンの種族値を本来の2倍くらいに上昇させてくれ。あとポケモンの持つべき力を最大限に発揮できるようにしてくれると嬉しい」

アニメでのサトシのピカチュウは異様なまでに強いが、ゲームだとめっばう弱いからなあ……

ピカチュウにアイアンテール覚えさせても、まったく相手のHPを減らせないし。

「わかった。お前が捕まえたポケモンの種族値はミュウツー並みにしてやるんじゃないか。サービスで後者の方も叶えてやるよ」

ミュウツーってwww俺のポケモンは全て兵器に様変わりとかwww
チャンピオンロードで適当に捕まえたポケモンでリーグ制覇できる
んじゃない？

「最後に、金色のガツシユのキャラが使用する術を俺が使えるように
してくれ。身体能力は…… ウォンレイくらいで」

「いや…… 別にいいんだが、ポケモンより強くなってどうすんだよ。
伝説のポケモンでさえ、お前を倒すことができなくなるだろ」

「元々ポケモンはトレーナーを攻撃しないだろ」

「あ…… それもそうだな」

ゲームでは主人公のポケモンが奪われることがなかったが、それが
現実になるとポケモンなしでロケット団とかプラチナ団（注 プラ
ズマ団です）をボコボコにできるようにならないと……

「ポケモン盗まれちゃいました……てへっ」なんてことになっ
たら洒落にならん。

「まあ、いいか……。これ以上話すことを考えるのはきついので、
さっさとポケモンの世界に送るぞ」

おいおい…… そんなメタな発言していいのかよ。
つか、プロローグでそれはないだろ。

「んじゃ、せいぜい俺を楽しませてくれよ……」

そんな気楽な声がしたらと思ったら、この空間に俺の姿は跡形もな
く消えていた。

第0話 プロローグ！（後書き）

は、いいお約束でした。

『答えを出すもの《アンサー・トーカー》』を詳しく知りたい方は、『金色のガッシュ！！』をお読みください。

子供時代だつてばよ！某忍者漫画の主人公風に言つてみたが深い意味もないし、

というわけで、俺がポケモンの世界に転生してから6年の月日が流れました。

なに？展開が速すぎるって？

俺の名前すら出てないだとか？

なら聞くが、お前らは喋れもしない赤ちゃんからの話が読みたいのか？

原作キャラが一人も登場しないんだぞ？それでもいいなら、一話一年ごとの流れで書くが……

ごめんなさい。調子に乗りました。

無理です。そんなにストーリーを考えるのは勘弁してください。作者が泣いて土下座をしているので、許してやってくれ。

俺も行動するのがだるいし。

「ゼオン〜早く支度しなさい。あの子が待っているわよー」

「わかってるよ〜」

一階にいる母さんの声が聞こえてくる。

そう……ゼオンとは俺の名前だ。

初めて聞いた時はもうめっちゃくちゃ喜んだね。

だって、俺ガツシユのキャラじゃゼオンが一番好きなんだもん。

「この白銀の髪と紫電の瞳……成長したゼオンと言うべきだな」

自分の部屋にある鏡に映ってる俺自身。

ショートに整えた髪を櫛で梳かしながら観察してみる。

どう見ても日本人離れた容姿だよなあ……それなのに設定上は日本人だという……。

この地方は一応ニューヨークがモデルになっているんだよな……謎だ。

「チラーミィ〜、グレイシア〜バッグとライブキャスター取ってきてくれ〜」

『チラッ！（レイー！）』

俺のパートナーである2匹から良い返事が返ってくる。

トコトコと歩いて俺の元に持ってきてくれる姿は………すごい愛らしいぜ。

チラーミィからはライブキャスターを。グレイシアからはバッグを受け取り、2匹の頭を撫でる。

ああ……癒される。犬や猫とは違った癒しがあつていい……

ここはブラックホホワイトの舞台イッシュ地方だ。

そして、この家はライモンシテイの一角にある一軒家。

父と母はこの町で経営するパン屋のオーナーであつて、週二回は家を留守にして色んな町にパンを売りにいつている。

時々俺もチラーミィとグレイシアと一緒に手伝わされたりする（一応俺もパン焼けるぜ？アンサートーカーの能力で火加減とかこね方は完璧だし）

ん？なんでイッシュ地方なのにグレイシアがいるのかつて？

その答えはこうだ。

俺が3歳の誕生日にイーブイの卵を両親にもらい、その一年後の誕生日に孵った。

で、俺のアンサートーカーの能力でどうすればこの地方でグレイシアに進化できるかという問題の答えを出して、その答え通りの行動を行ったら……数カ月後に進化したとき。

いや、俺イーブイ系の中でもグレイシアが特に好きなんだよな

チラーミイはグレイシアと一緒に散歩していると、やたらと傷ついたチラーミイが倒れていたの、たまたま持っていたきずぐずりと俺特製のパン（命名レインボーパン。結構美味しいぞ？）を上げて介抱してやったら、懐かれて……捕まえました。

「あれ持った。これも持ったし……忘れ物なし。降りるとしますか」
右にグレイシア。
左肩にチラーミイを乗つけて一階へと駆け足気味で降りる。

「母さん、行ってきましたー」

「今日も頑張って勉強してきなさいよー」

リビングで家事をしているであろう母さんに挨拶をし、玄関でランニングシューズ（改造済み）に履き替える。
玄関を出ると、そこには膨れっ面でいる俺と同年代くらいの女の子が立っていた。

「おーそーい！」

開口一番がそれかよ。
多少の遅刻は許してほしい。

「わりいわりい。今日は人生について深く考えていてな「嘘だー！」
ひぐらしかよ」

とは言っても迫力はなく、本家に比べりゃかわいいもんだ。
このネタがわからんやつはニコ動で竜宮レナと検索してみな。
ホラーや心臓が弱いやつはやめといたほうがいいけどな。

「チラーミイ、グレイシアおはよー」

にぱーと笑顔で挨拶する。こいつらもかわいいが、この天使のような笑みにも癒されるぜ……。

あ、言っておくが俺はロリコンじゃないからな！

俺は大人のおねーさんみたいなバインバインにしか興味ありません。

この女の子は誰だと？

その答えは簡単だ。

俺と同じショートに整えただが少し艶のある金髪で、洒落つ気のある服。

そして、この町はどこですか？

A ライモンシティ。

これらから導き出される答えは――

「そろそろ行くぞカミツレ」

「あ、待ってよー」

次期ライモンシティジムリーダーのカミツレさんです。

ここらで俺とカミツレの関係を説明しておこうか。
カミツレと初めて出会ったのは俺がチャーミィとグレイシアと一緒にパンを作っている母さんたちの手伝いをしていた時のこと。
家族連れで来た客に俺と同じ年くらいの女の子がいたので、暇を持て余していた俺はなんとなく話かけてみたのだ。

……あの頃はその子が未来のシャイニングビューティー（笑）の肩書きを持つカミツレだとは思わなかったよなあ。
性格も原作とは別人のように違うし。

いや、一緒だったらそれはそれで問題な気がする……。

子供の時から、成熟してる精神年齢って……どこの名探偵だよ。
まあ、カミツレと俺の関係は幼馴染みだ。
それだけ。

……なにか言いたいことでも？

「はよーっす」

「おはよーっす」

ライモンシティ発の電車に揺られて約1時間。

俺とカミツレはサンヨウシティのトレーナーズスクールに今年から通い始めたのだ。

このスクールは6年制であり、一学年3クラスに別れて勉強している。

俺とカミツレはなんとも都合主義なことが、同じクラスである。

「やあ、おはよう。ゼオン君にカミツレさん。昨日は良い天気だったね」

「はよっす、アーティ。」

昨日は大雨だったぞ。太陽は雲に覆われていたからな」

「おはようアーティ。明日は良い天気だったね」

「いや、カミツレそれは文法自体が間違ってるぞ。未来なのか過去のことなのかはつきりしろよ」

「そうなの？ やっぱりゼオンって頭が良いんだね！」

「そうだね。僕なんて愛しのポケモンと1日中絵を書いていたから、天気のことなんて気がつかなかったよ」

あっはっはーと笑う2人。

常々思ってるが……こいつら本当にあのアーティとカミツレなのだろうか。

アーティとは同じクラスで、やたら目立つ服装で浮いていた存在だったのだ、カミツレを連れて俺が話しかけたら……今に至るという

わけだ。

この頃からセンス悪かったんだなこいつ。
カミツレはカミツレで原作に装着していたヘッドホンのようなものは付けていない。

なーんて、ちよっぴり失礼なことを考えつつ3人で雑談をしていたら、後ろのドアが勢いよく開いた。

「ギリギリセー！ーフツ！みんなおっはよー！」

こんなHRギリにでかいボリウムで入ってくるやつは、俺の知り合いにはあいつしか浮かばない。

「ゼオン君もカミツレちゃんもおっはよー！」

赤毛の髪に寝癖を付けたままこっちに来て笑顔を向けてくる。

「おはよ、フウロ。お前寝癖凄いぞ」

「おはよう、フウロ。今日も凄い寝癖だね」

「あれ？フウロちゃん。僕に挨拶はないのかい？」

はい。これまたなんとも都合主義なことか、未来のフキヨセジムのジムリーダーになるであろうぶっ飛び少女の異名を持つフウロとも同クラスなのだ。

フウロとの邂逅は、アーティよりも仲良くなる前のこと。

まだ原作みたいに貨物機に乗る服（名前は知らん）は着ておらず、

普通の私服だ。

髪もちよつと長めだが、リボンで結んでなく下ろしている。

入学式が終わり、俺とカミツレが教室に入室すると中から声が廊下全体にまで響き渡って来たのだ。

「誰かアタシとポケモンバトルしようよ！」

と教室のと真ん中で叫んでいた姿はぶっ飛び少女（頭が）の名に相応しいと思った。

誰もフウロとの勝負は引き受けなくて、俺もカミツレも面倒だったので（カミツレは俺が興味ないと言って、自分の席に歩いていったら後から追い掛けてきた）スルーした。

だが、挑戦者がいなくて、イライラしてきたのかさらに喧しくなつて遂にはほえるを使ってきたので、仕方なくカミツレが名乗りを上げたのだ。

で……バトルが始まったのはいいが、如何せんフウロはひこうタイプのエキスパート。

でんきタイプのカミツレとは相性が悪く、勝負は一瞬で決着がついた。

フウロのコアルヒーが技を繰り出す前に、カミツレのシママの方が断然すばやさが速く、でんきショックで、はいさようなら。

4・5倍の威力で一撃ノックアウト。

このバトルをきっかけに、フウロとカミツレは仲良くなり、カミツ

レと良く行動を一緒にしてる俺とも自然と仲良くなっていっただの。俺にも勝負を挑んできたが、ミュウツーとアンサートーカの前にはなすべがあるはずもなく、無敗の記録を作りあげている（カミツレとアーティとのバトルも無傷の勝ち星を上げている）

「アタシの寝癖なんかどうでもいいの！それよりもビッケニユースがあるんだよ！」

「それはもしかして、今日の授業にトレーナーの方が来ることかい？」

「むーっ、なんで知ってるの！」

「なんでって言われても……こっちがなんで責められるのか聞きたいよ」

ガキ特有の理不尽なやり取り。僅かながら、アーティの方が精神年齢が上だ。

にしても……トレーナーねえ。

「カミツレ。お前は知ってたか？トレーナーが訪問するってやつ」

「ううん。今初めて聞いたよ」

だよなあ。

休日前の登校日には先生なんも連絡事項なかったし。

「職員室で先生たちが話していたんだよ。遥々シンオウ地方から旅のトレーナーが授業に協力してくれるって」

「ああー！アタシが説明しようと思ったのに、どうしてまた先に言っちゃうの！」

「いや……そんなこと言われても……」

「フウ口察してやれ。アーティは影が薄いから、必死に自分の存在をアピールしてんだ」

「そ、そそんなことないよ！ただ僕は知っていたことを――」

「そうだったんだ……。ごめんね、アーティ君……そんなこと知らずにアタシ……」

「謝らないでいいからねっ？僕は別に「そろそろチャイムが鳴るなカミツレ、フウ口行くぞ」って、誤解したまま行かないでよー！ー！っ！！」

叫ぶアーティをその場に放置し、自分の席に向かう。

トレーナースクールの席は前世の時にある学校とは違い、横長に繋がっている。

真ん中が俺、左がフウ口、右隣がカミツレというこの二人に挟まれた配置になっているのだ。

アーティ？あいつは俺の後ろです。

この机は3人までとなっているので。

「朝のHRを始める前に、みんなに紹介したい人がいます」

教卓の前で先生が話し始める。

紹介したい人……さっきアーティが言ってた旅のトレーナーか。
シンオウ地方からねえ……誰だか知らんがご苦労なこった。

「遥遥とシンオウ地方から、トレーナーさんが来ていただきました。
ポケモンバトルの実習を行うさいにお手伝いをしてもらえるそうなので、粗相のないように礼儀正しくしましょうね」

「はい」とそこらじゅうのガキどもの返事が。

……俺6年もこいつらとやっていくんだよね？
このままアホになっちまったらどうしょ……

「それではシロナさん。入って来てください」

扉から一人の女性が入ってくる。

え？シロナ？

「えっと、みんな始めまして。私はシロナっていうの。今まではカントーとジョウト地方を旅してきたの。それで今年はイッシュ地方を回ろうと思って、サンヨウシティまでやってきました。まだまだ新米だけど、わからないことがあつたらなんでも聞いてね」

またガキども（俺を除く全員）が元気良く返事をする。

……こいつは驚いたな。

まさか、未来のシンオウ地方のチャンピオンがこんなとこにやってくるとはな。

だが服装も雰囲気も原作とはまるで違うな……。推定年齢は……。13くらいか？

「これでHRは終わりますが、1時間目の授業はポケモンバトルの実習に変更しますので、グラウンドに集合してくださいね。ではシロナさんも」

「はい」

そう言つて、女教師と未来のチャンピオンは教室を出て行つた。それと同時に騒がしくなる教室。

「ねえねえ、ゼオン君聞いた？シンオウ地方からだって！」

フウロが興奮気味に話しかけてきた。

「私シンオウのポケモンはほとんど知らないから、楽しみ」

カミツレの言うとおり、こいつらはグレイシアぐらいしか知らないんだっけ。

原作の主人公はまだ活躍してないってことだよ…… ナナマカド博士の名前すら聞いたことないし。生まれてきているのかすら謎だ。

「シロナさんは虫ポケモン持っているかな？ いたら見せて欲しいな」

残念だがアーティよ。俺が覚えてる限りではシロナは虫タイプのポケモンは所持してないぞ。

つか、虫系統のポケモンを女性が扱うことはほとんどないだろ。

「まあ、それは後でわかることだろ。さっさとグランドに行くぞ」

朝と同じくチラーミィは俺の肩に、グレイシアは俺の横で歩き、教室を出る（基本俺はこいつらをモンスターボールにはあんまり入れない）。

後から3人が駆け足で追ってきたが、それよりも俺はあることを考えていた。

「（シロナか…… 久々に楽しめそうなやつだ）」

俺とバトルすることになったら…… 覚悟しとけよ？

子供時代だつてばよ！某忍者漫画の主人公風に言つてみたが深い意味もないし、

原作キャラの性格が違つのは子供だからです

シロナさん登場！いや、前回から出てたけどww

「ダルマツカ！さわぐー！」

「ヒヤップ！みずでっばうで迎え撃って！」

どうでもいいクラスメイトのどうでもいい試合を観戦してるわけだが……………

つまらん。ひつじょーにつまらん。

初めのカミツレ、フウロ、アーティの試合は見て見て見ごたえがあったが、それも最初のうち。

3人の試合が終わってからめちゃくちやにつまらん。

というか見ていてイライラする。

アンサートーカーを使わずとも、避けられる攻撃はトレーナーの指

示が曖昧で、無駄なダメージを受けるわ。

反撃のチャンスだったのに、なぜかなきごえとかにらみつけるなどサポートに徹したり……いや、ガキなんだからしょうがないとはいえ、精神年齢が二十歳以上三十路以下の俺にこんな試合を見せられるのは……つらい（精神的に）

俺の試合は一番最後だしな……はあ、チラーミイとグレイシアを抱きしめて、気を紛らわそう。

「うわあ！ダルマツカ！？」

「ダルマツカ戦闘不能ね。よって勝者はミカちゃんになります」

「やったあ！よくやったねヒヤップ！」

シロナのジャッジで勝敗が付いた。

あの女の子ミカって言うのか……一ヶ月も同じクラスなのに知らなかった俺って……

「うーん。やっぱりヒヤップが勝ったね」

「相性が悪かったからねえ。ヒヤップは水タイプでダルマツカは炎タイプだからね」

「ゼオンはどっちが勝つと思ってたの？」

俺を取り囲むように地面に座ってる、未来のジムリーダーたち。

パートナーのシママの毛並みを整えながら、カミツレが聞いてきた。

「そうだな……相性では悪かったが、ダルマツカにも勝機はあった

ぞ」

「そうなの？アタシは最初からヒヤップが勝つって思ってたよ」

「僕もだね。タイプの愛称だけでほとんどの勝負は決着が付くって、先生も言ってたし」

「それはどうかな？お前らダルマツカ的能力値は知ってるか？」

「……授業で習ってないよ」

授業でダルマツカのことを勉強するかは知らんが……いや、しないだろうな。

「ダルマツカは物理攻撃に特化したポケモンであって、特殊攻撃はまったくもってむいてないんだ」

「？それがどうかしたの？」

コアルヒーにオレンの実を食わしてるフウロが首を傾げて、わからないと態度に表す。

「あいつが最後に出したのはさわぐだ。さわぐはいっけん物理攻撃にも見えるが、あれは特殊タイプの技だ。ダルマツカに使わせても威力はほとんどない」

「だけど、あのダルマツカは他の物理技はほのおのパンチしかなく、つたはずだよ？」

「効果がいまひとつだとはいえ、ほのおタイプの技だ。ポケモンの

タイプと技のタイプが一致するとどうなる？」

「あ、そっか。1・5倍になるんだよね」

さすがカミツレだ。
よく勉強してるな。

「その通りだ。威力が90で特殊技のさわぐと、威力が75——
—56の物理技。ダルマツカだとどちらが良いのかなんて明白だ」

「へえ……そこまで考えているんだ」

『え？』

後ろから声がしたので、振り返りその声の主であろう人物に目を向ける。

「なんだ。誰かと思えばシンオウ地方のトレーナーか」

「……私嫌われちゃったのかな？そうじゃなかったら、私の名前を呼んでほしいな」

黒い衣装が好きなクロナさん——もといシロナが複雑な表情で屈んでいました。

「名前忘れた」

「嘘つかないの。物知りのゼオンがなにかを忘れるなんてこと滅多にないもん」

幼馴染はみやぶるをつかった！

いや、俺も物事をどわすれすることだってあるぞ。

「よくわかったな。このトレーナーはシロナだろ？わかってるって」

「ゼオン君……さすがに呼びすては失礼だよ。シロナさんは年上な
んだからちゃんと敬語を使わないと」

「あはは。別にいいよそんな些細なこと。子供は少しやんちゃなく
らいがちょうどいいものね」

そう言つて俺の頭を撫でてきやがる。

あんたも十分子供だろうが。精神年齢では俺のほうが勝ってるし。
手を払いのけようと思つたが、なんとなく居心地がいいので好きに
させてやる。

「あの！シロナさんはどんなポケモンを持っているんですか？」

コアルヒーを抱きかかえたまま立ち上がり、興味津々と言つた目で
シロナを見るフウロ。

「私？うーん……気になる？」

『はい！』

うおっ！いつの間にかバトルしてるやつ以外のクラス全員が周囲に
いるんだが！

五感能力が野生並みに鋭くなってる俺が気づけないとは……こいつ
ら中々やるでござるな。

「ふふっ、私もみんなにイッシュ地方のポケモンを見せてもらったもんね。私だけ見せないってのはフェアじゃないから——出ておいで」

上空にモンスターボールを4つ放り投げ（いくつかスーパーボールやハイパーボールが混ざっていた）お馴染みのSEが鳴り、中からシロナの手持ちが出てきた。

『わぁ————！』

俺以外のガキどもがすぐさまに特攻していった。

俺と一緒にいた、カミツレ、フウロ、アーティモ——ってあれ？

「カミツレ。お前はじゃれ合いに行かないのか？」

ポツンとカミツレだけが俺の隣に座ったまま、シママを撫でていた。それが気持ちよかったのか、体が規則的に上下したらと思ったら、寝息が聞こえてきた。

「シロナさんのポケモンは気になるけど……ゼオンが行かないなら、私も行かない」

なんだ？ゼオン依存症症候群でも発祥したのか？

顔も妙に赤い気がするし……

「ふん……」

ガキたちのところに視線を移すと、なにやらシロナのポケモン講座が始まった。

おい、バトルはどうした。戦っていたガキ二名も聞きに入ってるし。

先生も大学ノートを取り出して、記録取ろうとしてるし……俺としては授業が潰れて好都合なんだが。事実シロナと戦うのめんどいし。

「ねえ、ゼオン？あのポケモンはなんていうの？」

カミツレが指したポケモンは——ロゼリアか。

「ありゃ、ロゼリアだ。ハウエン地方に生息する草毒タイプのポケモンだ。進化前はスボミーと言ってシンオウ地方の方に生息するんだ。多分だが……シロナはスボミーから育てたんだろうな」

「進化前は違う地方に住んでいるんだ……」

「 그레이シアと一緒にだな。イーブイはカントーだし、進化系はそれぞれ違う地方で進化することが条件だからな」

エーフィやブラッキーは例外だが。

俺の 그레이シアは別だ。

うーん、 그레이シアの体温って冷たいよな。

今日はそこそこ暑い日だから、アイス代わりなってちょうどいい。

「そうなのよね〜でも君の 그레이シアはなぜか進化してるし……シンオウ地方に来たことがあるの？」

俺様のパーフェクトポケモン教室を開いていると（生徒は一名）シロナがフウロとアーティを引き連れてこっちにやってきた。
ん？スーパーシロナ様教室は終わったのか。

「俺は一度もイッシュ地方から出たことはないぞ。進化の方法なん

て一つだけじゃないってことさ」

そう言ったら、シロナが俺と同じ目線に高さを合わせ、じっと見てきた。

こいつの肌名前通り真っ白だな……って、なに考えてんだ俺は。

「やっぱり君って面白いわね。最初見た時から、他の子とは違うって薄々感じていたけど」

そりゃそーだ。

瞳に雷の模様が入ってるやつなんていねーよ。

「よし！他のみんなのバトルも終わったようだし、残るは君と私だけね」

ああ……俺でラストか。

シロナと対戦することはもう決まっていた。

先生が勝手にポケモンバトルの成績がトップの人がシロナと対戦しろと言われていたのだ。

つまり、完全無敗の俺がシロナと戦えるってわけだ。

「よっこらせつと。んじゃ、使用ポケモンは2匹でいいか？俺にはこいつらしいないんで」

芝生から立ち上がって、肩に昇ってきたチラーミィと俺の周りをぐるぐる回っているグレイシアを見せる。

「ええ、いいわよ。それでは先生審判をしていただけますか？」

「もちろんです！」

先生……目を マークにすんなよ……はつきりいつてキモイぞー。

「ゼオン頑張つてね！」

「ゼオン君吹き飛ばしちゃえー！」

「ゼオン君、ピンチになったらきずぐすりを使うのも一手だからね」

友達3人《未来のジムリーダーたち》から激励の言葉やら、アドバイスの言葉を投げかけられる。

他の生徒たちからも色々言われたが、忘れた。

バトルフィールドにゆつくりと歩いて行き、シロナと対峙する。

「改めて自己紹介するわね。私の名前はシロナ。使用するポケモンのタイプは統一してないわ。いつかはシンオウのチャンピオンになることを目標に旅を続けているわ！」

おおう、自分たちのポケモンをバックにしている姿は様になってるぜ。

「俺の名はゼオン。別に覚えとく必要はないからな。使うタイプは（現在は）こおりとノーマル目標は……まあ、なんらかの形でトップになることってことにしといてくれ」

俺の適当な紹介に周りがずっこける。

これって漫画やアニメだけだと思っていたんだがなあ……あ、この世界も一応アニメか。

「しといてくれって……明確な目標や夢を持っていたほうがいいわよ?」

「いいんだよ。まだ保留にしてるだけだ」

ん……あいつが持つてるポケモンはロゼリア、ルカリオ、トゲチツク、ガバイトか。

まあ、相性からして鋼格闘タイプのルカリオを出してくるのは確実として……大將はガバイトだろうな。

こんなアンサートーカーを使わずとも余裕で予測できる。

「こほん。それではただいまより、ポケモントレーナーシロナさんとトレーナーズスクール見習いトレーナーゼオンのポケモンバトルを始めます」

緑の旗をシロナの方に、赤の旗を俺側に上げる先生。

ガキたちの試合には使わなかったよな……差別じゃね?

「それでは――バトル開始!」

旗が振り下ろされ、戦いの幕が開けた。

シロナさん登場！いや、前回から出てたけどww（後書き）

連続投稿はここまでですね！

ポケモン理論が間違ってるかも知れませんが、そこはみなさんの想像力でカバーしてください！

シロナさんフルボッコｗｗｗｗ主人公に慈悲の心はありません・・・多分w（前

久しぶりの投稿w

データが無事だったのはこの一文だけ・・・はあ。

今日投稿した萌えもんの方ですが、知ってる方はどうかよろしくです。

シロナさんフルボッコwww主人公に慈悲の心はありません・・・多分w

「ルカリオお願い！」

「チラーミイいつも通りでいくぞ」

さて……さっそくだが、アンサートーカーを使わせてもらおうしよう。
Q ルカリオのレベルは？

A 38

13レベル差か。

シロナの年齢ではそこらにいる大人より高い。
さすがと言うべきか…ゲームだったら、詰んでる状況だが……俺のチラーミイは可愛い容姿とは裏腹に凶悪な能力値だし、アンサートーカの適格な答えどそんな不利な状況を覆すことができるのさっ！
ふっふっふ……シロナさんよ、あんたにレベル差が絶対的勝利条件じゃないってことを教えてやるぜ！！

「大人気ないかもしれないけど、先手は取らせてもらおうよ！ルカリオ——」

繰り出してくる技はバレットパンチ。

「バレットパンチ！」

右ストレートのパンチで突進方か。

先制攻撃の技はスピードが早い。

ふつつ、咄嗟の判断で避けるのは難しいだろうが――

「チラーミイ右に避ける」

『チラッ!』

俺の指示に軽く頷き、右にステップし華麗に避ける。

「(!?あの速さの技を避けた?)ルカリオ!」

「チラーミイ、その場でジャンプ」

直ぐ様に指示を出し、ルカリオは拳を横に振るうが、チラーミイはルカリオよりも一步速く行動していた。

「(また避けられ――)」

「そこから、尻尾でたたきつける」

レベル的にたたきつけるは覚えてないが、どうやらなんとなくわかったみたいで、見事なたたきつけるがルカリオの頭に入った。

「ルカリオ!!」

頭をたたきつけられ、地面にもたたきつけられたルカリオだが、ノーマル技のたたきつけるでは鋼タイプのルカリオを一撃でしとめることはできなかったようだ。

少しよろついているが、立ち上がるルカリオに安堵するシロナ。

「（レベルも能力値もルカリオのほうが勝ってるはずなのに、どうしてこれほどのダメージを……でもまだまだ！！）ルカリオーピンチになっても諦めないわよね！」

シロナの言葉にルカリオは瞳に闘志の炎を燃やす。
その様子に笑みを浮かべるシロナ。

「さあ、反撃よ！受けたダメージをバネにきしかいせい！！」

うん。それも予想してた。
HPゲージが赤できしかいせいのコンボはゲームでもよく使ってたことがあったからなあ……

ルカリオはさっきのやられを教訓に一回フェイントをしてくるはず
（技のフェイントではない）

「チラーミィ、後ろからだ」

「えっ！？」

ルカリオがチラーミィの目の前に迫り、攻撃を出すふりをして、後ろに回りこむ前に、チラーミィは素早く百八十度向きを変える。

「必殺のスイープビンタ」

今のチラーミィが使える最強技を使い、ルカリオの頬に五回連続で尻尾ビンタを叩きこんだ。

俺のチラーミィの特性はスキルリンク。

二回から五回までの回数をランダムで攻撃する技が最大回数になる。

なので、スweepビンタやおうふうビンタのような運任せの攻撃が十万ボルトやかえんほうしゃ等の攻撃力にも劣らないほどに協力になるのだ。

その証拠に……ほれ。

「ルカリオ！しっかりして！」

目を回して仰向けに倒れているルカリオと、ルカリオに駆け寄るシロナの構図が。

さっきのたたきつけるのダメージもあって、完全にノックアウト……戦闘不能だな。

「ル、ルカリオ戦闘不能！チラーミィの勝利！！」

見習いトレーナーの俺が勝ったことに驚きながらも、判定を下すデイーチャー。

「やったあ、ゼオンの勝ち！」

「この勢いで次も頑張ってね！」

「いつみてもゼオン君のバトルは凄いね……なにひとつ無駄がないよ」

ガキどもがいる場所から、馴染みのある声が聞こえてくる。
完全試合。

無傷で勝ちました。

「よしよし、良くやったぞチラーミィ」

チラーミィに腕を差し出し、俺の腕を駆け昇って定置（肩に）に乗って顔にすり寄ってくる。

その様子をグレイシアが羨ましそうに見ている……………気がする。多分。

「ありがとうルカリオ。ゆっくり休んでね」

ルカリオをモンスターボールに戻し、後方にいるガバイトに合図を送るシロナ。

ゆっくりと言う言葉に東方を思い浮かべた俺は、技マシンで弾幕技でも作ろうかなあと、バトルにまったくもって関係ないことを考えていた。

「私のルカリオをノーマルタイプで倒したのは君が初めてだよ（しかも1ダメージも与えられずに……）だけど、まだまだ勝負はこれからだから！ガバイト！！」

ポケモントレーナーのシロナはガバイトを繰り出してきた！ゼオンはどうする？

もちろんグレイシアにバトンタッチだ。

「選手交替。グレイシア
レッツラゴー」

ガバイトのレベルは41。
だがレベル差なんて関係ない。

ドラゴンじめんの相手なんて、殴って凍らせてジャンケンポンして、こおりづけ状態のまま冷凍コンテナに置き去りにしてやるぜ！

「一気に決める！ガバイト、かえんほうしゃ！」

ガバイトの口から燃え盛る火炎の息がグレイシアを焼きつくそうと襲いかかる！！

だが甘い！プリンに醤油をかけたプリンより甘いわ（味が変わります）！

とくこうに特化したグレイシアに、ガバイトのかえんほうしゃなんか遅れをとるはずがない！

「グレイシア…あそこだ」

グレイシアの頭に手を置き、アンサーターカーで導き出したかえんほうしゃのある箇所を指す。

特訓通り、グレイシアは俺が指した箇所にすぐ顔を向ける。

チラーミィとグレイシアには俺の指示は直ぐ様に反応できるように特訓済みなのだ。

なんか、クラスの連中が騒がしいな……避けてーとかあぶないとか……。

グレイシアも俺自身もこの程度の火炎に焼かれるわけがない。

「れいとうビーム」

口から出る冷気の光線はいとも簡単にかえんほうしゃを貫き、そのままガバイトに進んで行く。

「うそ……岩をも溶かすガバイトの炎が……」

あ、こりやもう俺の勝ちだな。

トレーナーが啞然としてちや、ポケモンもどうすればいいかわからなくなつて――

「あ、ガバイトっ!!」

ガバイトはモロにれいとうビームをくらい、一撃で撃沈した。

「ガバイト戦闘不能、グレイシアの勝利! よって、勝者見習いトレーナーのゼオン!」

俺の勝利が確定した瞬間、クラスメイトたちが俺に向かって走って来ていた。

「あゝあ、負けちゃったなあ。結構自身あつたのに」

クラスの連中に囲まれて胴上げなんてことをされていたら（チラーミィとグレイシアを含む）シロナが負けたというのに、気持ちのいい笑顔でやってきた。

「よつと。あんたが弱かったわけじゃないぜ。俺とチラーミィたちが強すぎただけだ」

空中で方向転換し、チラーミィとグレイシアを掴んで、シロナんとここに降り立つ。

俺のアクロバティックな行動に、シロナやクラスメイト（数名は除く）呆気にとられてた。

はい、良い表情いただきました」

「自分で言うかな……」

「俺は謙遜なんてしない性質でね……あふあゝなんか眠くなってきたわ」

相棒たちを連れて、校舎に向かう。

「あつ、どこ行くの？」

「教室。戻って寝る」

「私も行く」

「私も！」

「教室で寝るより、ここで日向ぼっこした方がいいと思うけどなあ……僕も着いていくんだけどね」

「こらあ！4人とも授業中ですよ！！」

先生が彼らを呼びとめようとしたが、先生の言うことを聞かずそのまま玄関に入って行った。

「ゼオン君か……」

不思議な男の子だったわね……彼と話していると年上と話しているみたいに感じる。

それにゼオン君以外の子達も他のクラスメイトの子たちとはなにかが違う。

……将来はきっと大物になるわね。

「私も負けてられないなあ」

ガバイトを撫でながら空を仰ぎ見る。

空はとても青くて……何かが始まる予感がした……

シロナさんフルボッコｗｗｗｗ主人公に慈悲の心はありません・・・多分w（後

次回からは一気に主人公たちが成長する……予定でした。

うーん……続きが良く思いませんw

ステータス能力（前書き）

ゼオンの手持ちなのですが・・・一応ww
随時更新してく予定ですw

ステータス能力

ゼオン軍

チラーミィ ♂ L V 2 5

技 おうふくビンタ

スィープビンタ

スピードスター

ふるいたてる

その他 e t c

特性 スキルリンク

性格 がんばりや

能力値

H P 9 5

こうげき 7 6

ぼうぎょ 6 2

とくこう 6 0

とくぼう 6 9

すばやさ 1 0 1

グレイシア ♀ L V 2 8

技 れいとうビーム

ここえるかぜ

てだすけ

でんこうせつか

その他 e t c

特性 ゆきがくれ

性格 うっかりや

HP 128

こうげき 66

ぼうぎょ 124

とくこう 148

とくぼう 109

すばやさ 59

ゼオンの特殊能力でステータスは高めってことになってます。

マサラタウンに降り立った男（前書き）

久々の更新w w

ゼオンの物語りは地方放浪編にしました。

この話であるキャラがですが後悔も反省もしてませんw w w w w

マサラタウンに降り立った男

「ここがマサラタウン……地名通り見事になにもない（まっさら）な」

ポケモンセンターはおろか、ショップまでないとは田舎にもほどがある。

ゲームのスタート地点の町だからかもしれないが。

「せっかくここに来たんだ。ポケモン博士第一人者のオーキドに会いさつしてくるか」

俺の肩が定位置となりつつあるチラチーノにも意見を聞くように話す。

ポケモンにもちゃんと人の言葉が理解できるようで（種族によって差があるようだが）そのもっふもふな体毛を揺らしながらこくりと頷く。

？

シロナ対決の日からさらに数年経った。あの日からカミツレ、フウロ、アーティは自分たちの進むべき道を切り開くために、俺に弟子

入り志願をしてきた。

理解を聞くと俺とシロナみたいな強く高い志を持ったトレーナーになりたいとのこと（後者は間違いなくシロナ）

特に断る理由なんてなかったし、退屈しのぎにはちょうど良いと思っただので二つ返事で了承した。

修行の内用としてはまず知識を蓄えることを第一にして始めた。

勉強嫌いなフウロはぶーたくれていたが、マンツーマンで教えてやると言ったら、一転やる気を出した。

そしたらカミツレがあからさまに不機嫌となったので、結局個人に週2の家庭教師制度となった。

報酬はモンスターボール一個としよばいが、貰えるものはもらっておいた。

3人には今確認されているポケモンのタイプと技、技のタイプ、相性、アイテムの効果などを徹底的に叩き込んだ。

どんなにポケモンが強くてもバカ正直に特攻しても負けるに決まっている。

無印アニメでのサトシがピカチュウでイワークに挑んだ時なんて持ってた他だ。

対抗できる技があるならまだしもなにも策がないのに格上の相手に挑むなんて無謀にもほどがある。

俺は前世に前verを極めるまでプレイしたから3人の質問にもきちんと答えることもできたし、ポケモン図鑑なしでも大体の情報はわかる。

ポケモン博士のリトルのリトル。リトルリトルポケモン博士と名乗

っても良いくらいだ。

で、知識が十分に貯蓄できたら次は努力値のことに教えてや
った。

この世界では公には知られていないようなので、努力値を知ってる
か知らないでかなり違う。

カミツレは素早さとHP、フウロはすばやさところげき、アーティ
は防御ととくぼうの努力値を貰えるポケモンを倒しまくれと言っ
た。

アンサートーカーで調べてわかったことだが、一匹の努力値は少な
いが、ポイントの限度がないという点がある。

ここがゲームと違うところだな。時間はかかるが、俺たちには時間が
たんまりとあるから関係ないがww

三人が狩ってる間は俺も違うポケモンをフルボッコにして努力値を
稼いでいた。

アンサートーカーで導きだした答えだと、グレイシアもチラチーノ
も総計努力値はすでに4桁を超してた。

どうやら、俺の特殊能力だが知らんが俺が育ててるポケモンは努力
値が5倍くらい獲得できるみたいだwwww

強制ギブス涙目だなwww

他にも戦術や地形を利用した戦い方などを教えておいたが、まあそ
れはいつかまた話すことにしよう。

で、あいつらに教えることがなくなった俺は暇で暇でしょうがなか

ったので旅にすることにしたのだ。

両親は賛成してくれたが（トレーナーズスクールは超飛び級卒業しましたwww）、弟子三人のうち二人は……

「いや！ゼオンが行くなら私も行く！！」

「鳥ポケモンがいないゼオン君には私が必要だよ！だから私も連れてって！！」

などと泣きながら駄々を捏ねて着たので説得するのに時間がかかった。アーティは笑って送り出してくれたが……。

それだけじゃなく、旅から帰ってきたら一緒にジムリーダーになるうとんでもない条件を提示されてきたもんだから、発つのをとりやめようと思った。

……数年は戻らないほうがいいよな。

小さいころの友達がお嫁さんにしてゝなんて言う子供特有の冗談？みたいに時間が経てばきっと忘れるだろう。

なんて数日前のことを思い返していたら、オーキド研究所前に着いた。

ちなみに、俺がどうやってイッシュ地方からカントー地方まで来たのかというと、気の応用である浮遊術で飛んで行きましたwww
そらをとぶ必要ないねwww

「なんかボロっちいな……ホントにここがあの変人で有名なじいさんの研究所なのか？」

ネームプレートにはオーキド研究所と書かれてあるから間違いなくここのはずなんだが……

「きつと貧乏なんだな。施設をでかくする金もないんだろうな。じや、中に入るからチラチーノはボールの中に入れてくれ」

俺の手持ちは三匹とあの頃から一匹しか増やしてない。

相棒であるグレイシアとチラチーノの他に仲間にしたポケモンは……

……リーフィアだ。

トレーナーズスクールのモブ生徒からイーブイの卵をおd——
もらい進化させた。

リーフィアかわゆすwww

「じゃましまーす」

「な、なんだ君は。ここは遊び場じゃないんだ。さあ出ていった出ていった」

助手らしき男が俺を門前払いしようとしたので、脇をすり抜け背後に回り込み、首んとこにジャンピングカラテチョップを当て、意識を狩りとってやった。

出払っているのかこいつ以外の助手はいないみたいだ。
奥に人とポケモンの気配がするな……行ってみるか。

「……このピジョンは他のピジョンと比べて能力値が高いようじゃな」

足音と気配を完全に消し部屋に忍びこむと、ポケモン図鑑を使ってピジョンのデータを計っていた。

「同じ種族でも個体値はみなバラバラなのが当たり前なんだぜじいさん」

「むつやはりそうなのか。同種同レベルのポケモン同士をバトルさせていたのじゃが……」

「あんま知られてないがポケモンには性格によって上がりやすいパラメーターと上がりにくいパラメーターがあるんだぜ？知っていたか？」

「なんと！性格の違いで強さにも差が出るというのか！それはまた研究のしがいがありそうじゃ」

「頑張れよじいさん」

「感謝するぞ少年！」

ガシツとシワの多い手で俺の手を両手で握る。
知られてないことが多いねえ。

「……………つてなんじゃ小僧！何処から入りおつた！」

え、今さら？

アンタ今まで誰と話していたと思っているんだ？

「俺の名はゼオン。イッシュ地方からやってきたさすらいのトレーナーさ」

「それはまた遠くからやってきたのう……まさか一人で来おったのか？」

俺的にはそんなことよりさすらいのところに突っ込んで欲しかった。

「家族連れの旅なんて聞いたことないわ」

そりゃただの旅行だ。

いや、まてよ……旅の字が入ってるから旅行も旅の一種か？

「（……年はレッドたちと同じくらいか。だというのにこの少年からは自信に満ちた瞳と、まとっているオーラがあらゆるものを威圧するような錯覚に襲われる。将来は大物になるじゃろうな）人の研究所に入り込んでまでの用があるのかのう？」

「んにゃ別に。マサラタウンに来たついでに、オーキド博士にあいさつをしようかな……と」

ポケモン図鑑も頂戴しにきましたww

「ほう、今時珍しいくらいに礼儀正しい子じゃな。ところで、君はこれからカントー地方全域を回るつもりかね？」

「ん……まあ、そのつもりかな」

「そうか………会ってまもない君にこんなことを言うのもなんじゃ

が、ちと頼みたいことが――」

オーキド博士が言い終わる前に、入り口のそこから電撃が迸る破壊音が聞こえた。

「な、なんじゃ一体!？」

一目散に音の発信地に向かう博士。
その言葉を言ったらロケット団フラグが立つちまうぞ。

「ピ、ピカ? その傷はどうした!？」

ドアは黒焦げになっていて壁まで吹き飛ばされ、ドアがあった場所には傷だらけのピカチュウがいた。
その電撃に巻き込まれたのか、隅っこで助手が倒れていたけどどうでもいい。

ニクネームを知ってる辺りはたぶん博士のポケモンか、他の知り合いのトレーナーのピカチュウだろう。

「酷い傷だな……あれを使うか」

博士が研究用のポケモン回復器具を持ってきたが、俺は背中に手を突っ込んでばれないように、あるものを取り出す。

「ギター……? (服の中から出したみたいじゃが……大きさがおかしいような……)」

俺のチート能力の応用みたいなもんで作り出したものであって、ガッシュのキャラ『ティオ』の回復呪文をギターに閉じ込めた代物だ。

戦闘中に使うこともできるし、公式試合じゃないバトルとかには非常に使える。

「回復の絃はこれだな」

スターノヴァ（適当に付けたギターの名前）をかき鳴らし、透き通るような、普通のギターでは出せない音が響き渡る。

すると――

「ピカの傷が……癒えていく」

汚れは落ちていき、傷はみるみる塞がっていく。
利き目は抜群。一鳴らすだけですぐいきずぐすり一つの回復力がある。

ギターの効果は大きく分けて3つ。
ステータス能力を上昇させる曲の演奏。状態異常を回復できる演奏。そして、今使用した回復の演奏だ。

演奏の時間が長ければ長いほど強い効果を發揮できる。さっきみたいな短い演奏は瞬時に効果ができるが効果は劣る。
それでも十分に対応できるから、あんまし長い演奏をする機会はない。

「……ピ…ピカ」

「気がついたみたいだな。俺はゼオン。ただのトレーナーさ」

「……ピカ」

本能で回復させたのが俺とわかったのか、こっちに尻尾を向けてく

る。

そういやピカチュウ同士尻尾を絡めて握手するのがあいさつ代わりだって話を聞いたことあるな。

俺は人間だけど。

「よろしくな」

ぎゅっと尻尾を掴むと嫌われそうなので小指でげんまんする。

俺にも尻尾が生えていたら——やめておこう。

「（あのピカが他人に友好的とは……わしの知らない知識に未知の力を持ったギター……やはり彼に頼んでみるとしよう）それでなぜオン君、君に頼みが——」

博士がなんか言う前に、研究所に自転車の倍くらいの速度のドードーが突っ込んできた。

「えーい！次から次へと！今度はいつたいなんじゃー！」

二度も話の腰を折られりゃ、キレるはなww

ピカチュウといいドードーといい、この研究所はポケモンに荒らされすぎだろ。修理費とか大丈夫か？

「こんにちは」

ドードーに乗っていた子が降りて、俺と博士にあいさつしてきた。麦わら帽子を被り、服、髪の色が黄色の少年……？髪の毛が帽子ん

中にすっぽりと入ってるから判別できん。

多分女だと思うをだが……どうでもいいか。
きつとそんじょそこらの子供だろう。

幼女はさつさと家に帰んな。

「なんじゃお前は！？今は立て込んどるんじゃ、悪いが帰って……」

「あーっ！ここにいたんだあーっ」

博士の帰還願いも虚しく幼女（仮）はピカチュウを見るなり抱き締めた。

この幼女がピカチュウの主人なのか？
アンサーカーで出したピカチュウのレベルはそこそ高いんだが……

「町の入り口で聞いたとおりだよ。やっぱりマサラタウンに戻ってきたんだね！」

ピカチュウも幼女（仮）嬉しそうだ。

「おいお前は誰じゃ！名を名乗らんか！やっぱりマサラに帰ってきたとはどういふことじゃ！！」

「そんな一度に聞かないですよ。ピカもそう思うだろ？」

「ピカ！」

そこは幼女（仮）に同意。

ピカチュウも肯定するような鳴き声を上げてるし。

「（ゼオン君に引き続きこの少年にもピカがなついておる！？）」

「あっ、あなたはさっき僕を助けてくれたトレーナーさんじゃないですか！」

「えっ？……………あ、あゝお前はあの時の無

様に川で溺れてたやつか！名前は……………えゝっと……………

……………たしか……………イエロー・デ・トキワ

クローバー？」

「あの……………クローバーじゃなくてグローブです」

「そ、そうだったな。そんな野球製品みたいな名前だったけな」

「（……………野球製品？）あの時はちゃんとお礼を言ってなかったのので改めて言います。ボクとラッチちゃんを助けてくれてありがとうございます」

ラッチちゃん＝コラッタのことだ。

。なのにちゃん付けはどうかと思うが、人の嗜好にはあれこれ言わないことにする。

「気にすんな。礼を言われるほど大したことはしてない」

ホントに大したことはない。

長時間空を飛んでいたの、疲労が溜まっており腹も減ってたから一度降りて一息つくこうとしたのだ。

トキワの森で木ノ実みたいな食えるもんがないかと探索していたら、川で溺れていたコラッタを助けようとして溺れていた所を第三者の俺が助けた……………ということだ。

そういやあの時は麦わら帽子を被ってなかったよな。その時見た髪は長かった気がするが……まあいいか。

「それで……名前を覚えてくれませんか？まだ聞いていないので」

「そうだっけ？俺だけ名前を知ってるのは不公平か……。俺はゼオンド。カントー地方を見て回ろうかと思っているトレーナーだ」

この地方のポケモンをパーティーに加えようかとも考えている。三匹だけじゃ心細いし。

「そっか……旅をしようとしてるんだ……。あの！よかつたらボクとレッドさんを探しに行きませんか！」

ぶつぶつと呟いていたらと思ったら、急に顔を上げ迫ってきた。レッドだと……？

初代原作の主人公で、前回のカントー地方リーグ優勝者……ってフウロが言ってたな。

「お前レッドを知っておるのか！？それに探しに行くって……どういふつもりじゃ！」

「ピカのトレーナーであるレッドさんを探しに行きます」

「ええーいそんなことを聞いているんじゃない！事情を説明せんか！いいか？こいつはボロボロの状態で帰って来たのじゃぞ！レッドは一ヶ月前にシバというトレーナーに挑戦状を送られてきてマサラから飛び立った……。じゃが、レッドの行方は不明。ピカだけがやつとの思いでここに来た。これがどういう訳かわかるか？」

「ボクとゼオンさんが探しに行くことはわかります」

「わかつとらーんーん！！さりげなく了承をしてないゼオン君を頭数に入れるのではない！！彼にはわしの研究を手伝ってもらおうのじや！」

あんたも人のこと言えないからな。

黙って聞いてりゃ話が変な方向に進んでいつてるな……。

レッドねえ…… 全作での原点にして頂点と言われてる人物が気にならないわけでもない。

一人旅するつもりだったが、ぱしりげふんげふん！話相手がいるのも悪くはないだろう。

「少しは楽しめそうだな……」

完全に忘れさられている屍と化した助手を見て俺は不適な笑みを浮かべたのだった。

マサラタウンに降り立った男（後書き）

イエローカワユスwwww

作者はロリコンではないよ。ただ小さい生き物がかわいいと思うだけだww

イエローを知らない人はブックオフなんかで売ってるポケスぺの
桁の巻を読むといいよww

ふひひww

前回はまともなタイトルだったから、今回もまともだと思ったの？なんなの？

続き書いたおwww

サブタイの後半部分が伏せ字なのはちよっくら自重しましたwww
ネギまのSSを読んで、エヴァにちゃんと旅させたくなったのはおかしくない。至極真つ当な反応だwwwwww

あ、どうでもいいかもだけど今回シリアス分があるきんwww

前回はまともなタイトルだったから、今回もまともだと思ったの？なんなの？

「なんか食えるもん……食い物は落ちてないか……」

ここはトキワの森。

ひょんなことからイエローと旅することになって二日目。

俺は今食えるもんを探している。なぜこんなことになったのかという話は30分ほど前に遡る――

「そっぴやイエローお前所持金はいくら持つてるんだ？」

無駄に生えまくっている草むらを手で掻き分けながら進み、後ろでピカとチラチーノを抱きながら付いてくるイエローに聞いてみる。

あの俺の意思を完全に無視した口論から、博士がポケモンバトルで実力を見せてみよ！とイエローに勝負を挑みというさらにややこしい状況になり俺は審判をやらされるはめになった。

結論から言つと引き分け……みたいな形になった。

イエローが出したポケモンはドードーで対する博士はオニスズメで、ひこうタイプのバトルだった。

イエローの指示でオニスズメの周りをすばやく回りまくって、目を回させお互いダメージを負わずにバトルは終了した。

決着がついたというよりは戦闘は中止と言った方がいいだろう。

その戦い方を見込んだのか、博士はイエローにレッドの図鑑とピカを託しレッドに届けるように依頼した。

ちなみに俺にも図鑑をくれた。旅のついででいいのでデータに載ってないポケモンを捕まえてほしいと頼まれた。

ただどめんどくさいのでデータを埋める気はほとんどない。

俺自身が図鑑のようなもんだし、ボールを買う金があったら食費に回したいぜww

「800円あります」

「……そんだけ？」

「え？これだけあれば十分じゃないですか？」

思わず立ちどまってしまふ。

それを本気で言ってるなら今すぐ旅をやめるべきだと思う。

余ほどの貧乏なのかこいつは？

「なるべく余計なもんは買わないようにして、節約を心がけないと

な……」

俺は2人分の食費（手持ちポケモン含め）を払えるほど余裕があるわけではない。

森や川見たいな木ノ実、魚がある場所で過ごす時は自給自足でなんとかするだろう。

回想終了。

冒頭に戻る。

俺は採集を担当。イエローには釣りでポケモン以外の魚を取るよう言い渡した。

……ポケモンを食うとこなんて想像したくないわ。

副産物とかは別だが。ミルタンクの牛乳とかラッキーの卵とかは美味いしww

探し始めて約10分……特に食えるもんは――

クイクイ

足元からズボンの裾を引つ張られる感触が。
下を見るとリーフィアが裾を咥えて引つ張っていた。

「どうしたリーフィア？腹が減ったのか？」

首を横に振って違う違うとアピールし、前足でちょいちょいと俺に何かを見ると――

「お……あの木実がなっているみたいだな。そうか、この事を伝えなかったのか」

リーフィアは草タイプのポケモンだ。森や草原のような自然と緑がある環境では俺ら人間より、感覚が研ぎ澄まされているのかもしれない。

現にリーフィアが教えてくれなかったら、そのまま気づかずに素通りしていただろう。

「よくやったぞリーフィア。今日のMVPはお前だな。ヒーローインタビューでのコメント期待してるぜ」

頭を撫でて褒めてやる。嬉しそうにするリーフィアとは裏腹に空気となりつつあるグレイシアがバジバシと俺の足を叩いている。
なんだ嫉妬か？

「お前ら！あの食い物がある木に進路を取れ。全速 前進DA」

ニコ動を見ているやつでは知らない人はいない名言ランキングでぶっちぎりの1位（当社比）を言って、木のどこまで全力疾走する。
俺のふつくしく華麗な走りを目に焼き付けるが――

「っ！？緊急回避！」

身に危険を感じたので、咄嗟に横へ転がる。

俺がいた場所には二本の針が地面に突き刺さっていた。

「ダブルニードルか。トキワの森に生息してるポケモンでこの技を使えるのはやつしかない……」

俺に追い付いてきたリーフィアとグレイシアが低く構えて唸り、戦闘体制を取る。

起きあがり、服についた汚れを払って放ってきた相手と対峙する。

「この俺に牙を向けるとは良い度胸だな……スピアー」

俺に喧嘩を売った罪は海底よりも深く、グラードンよりも重いぜ？

我らの主人公が厨二臭い事を言っている頃、イエローはどうしているかというと――

「追い詰めたわよ……さっきまではちょこまかと動き回ってたけど、この密閉された空間じゃそうはいかないわよ。この冷気で身も心も凍るがいい！」

なぜか洞窟の中でバトルを繰り広げていた（といってもイエローは戦う気がないが）

「うお……ごつつさむう。このままじゃ凍え死ぬで！」

この地味で役にたたなそうな男はマサキ。

こう見てもそこそ有名なポケモン評論家らしい。

「どうするんや……！そうや！さっきのドードーで出口を封じてある氷を突き破るなんてのはどうや！」

「できるでしょうね……でも出た途端にあのトゲで狙い撃ちされるでしょう。敵にボクたちの位置はバレているんですから……」

それにあのトゲキャノンの威力……いったいどんなポケモンがどうやって打ち出しているんだろう？

一発のトゲはあそこまで強くないはず……

「あ、あそこを見てください。わずかですけど隙間があります」

「あのなあ、あんなちいさな隙間じゃ人一人通れるわけないやろ！」

マサキさんの言うとおりピカでも抜けるのはむずかしそうだ。

けど……ボールの中に入れば話は別。

どんなに大きいポケモンでもボールに収納できちゃう……ポケットサイズで持ち運び可能だから、ポケットモンスター。

作戦も決まった。後はピカをボールに――

「君は……」

肩にとんと軽い重みともふもふな柔らかい毛の感触が頬をくすぐった。

ゼオンさんが、『別行動の時は俺の手持ちから一匹護衛として貸してやる』って言われてずっとボクの後をついてきてくれてたんだ。

……そういえばボクがここまで逃げて来る時に幾多物のトゲの発射音が聞こえたことがあったけど、ボクたちを狙ってくるトゲは毎回発射音より少なかった。それはきつと――

「チラがボクたちを陰から助けてくれたんだよね」

チラチーノだから、チラ。

ゼオンさんのポケモンにはニックネームが付いてないから、ボクが考えた名前。

ゼオンに怒られるかもしれないけど、ポケモンをフルネームで呼ぶのは好きじゃないから……

「……ピカにチラ。この窮地から切り抜けるためにも、ボクに力を貸してくれる？」

ピカモチラもボクのポケモンじゃない。

リーグ公認のジムバッチを1つも手に入れてないボクが他の人の強いポケモンを従わすことはできない。

けど今のボクの手持ちじゃ、四天王のカンナから逃げきる手段はないから……

「っピカッ！（チラッ！）」

任せろ！と、とても頼もしい返事をしてくれる。

ゼオンさん……ボクはあなたに強引に付いてきてしまいました。

あの時ボクたちが溺れているのを助けてくれたその日から、ずっとゼオンさんのことが頭の中から離れませんでした。

この気持ちなんなのかな？まだわからないけど……ボクがゼオンさんに認めてもらいたいことは間違いない。

だから、見ててくださいゼオンさん！

友達の力を借りて、この状況から脱してみせます！！

その頃……天然すけこましの主人公はというと

「ふはははははは。この俺に牙を向けた結果がこれだよwww」

襲いかかってきたスピアーの群れを一人で全て退治していた。
毒針を持つ相手に素手で対応するシユールすぎる光景を見ていたグ
レイシアとリーフィアはお互い『私達の立場がないなあ』と考えが
見事にシンクロしていた。

「ふんっ、バカめ。貴様等なんぞ瓦礫の下にでも埋まっている」

主人公にあるまじき発言を残していつて、屍と化した（気絶してる
だけだが）スピアーたちが倒れている道を歩いて、木ノ実が成って
いる木に向かう。

そしてここからはゼオン視点

「はやく取ろうぜジンギスカン。はやく歩けよジンギスカン。
ン。モモンモモンモモンの実」

モモンの歌（仮）を歌いながら、目的の木から木ノ実をもぎとって
いく。

さすがに全部奪うのはここの生態バランスが崩れるかもしれんで、必要な分だけでもらっていく。

「こんなもんでいいか……よっと」

木ノ枝から飛び降りて、シュタツと着地する。

「こんだけありゃ、3日は持つな」

俺とイエローの分はもちろん、自分たちのポケモンも含む。

アンサートーカーで木ノ実の成分を調べてみたが、RSの木ノ実ではないが栄養豊富でびゃあうまiiiiiiii……らしい。

どんな味かは食えば解ることだ。

さっさとイエローと合流して――

「……ほう、まだ立ち上げられるのか」

一匹のスピアーだけは諦めずにやりあう気があるようだ。

羽はボロボロ全身は満身創痍なのに来た道に立ち塞がる。根性は据わっているな。

この群れの統治者 リーダー なのかもしれん。

「その心意気に免じて俺自ら闇に葬ってやろう……」

頭の中でブラゴが使用する第3の術『ギガノレイス』をイメージして、なるべく苦しまないように消してやる。

何度も言いますが、一応このSSの主人公です。

「…………ん？」

が、俺はスパアーが取った行動にかざしていた手を下げイメージを振り払った。

ふらふらと羽を羽ばたかせ、俺に突っ込むわけでも背中を向けるわけでもなく、西の方角へと向かって行った。
少し進むと振り返り、くいくいっと首を前にやる。

「俺に付いてこい……………と言っのか？」

こくつと無機質に頷き、俺たちを置いてってゆっくりと俺らが見失わないようなペースで進んで行った。

……………なんなんだいたい。

グレイシアとリーフィアはなんか相談してるようだが……………ま、どんな障害があるうと俺には無力で立ち止まらせることすらできないさ……………。

前回はまともなタイトルだったから、今回もまともだと思ったの？なんなの？

これを書いてる時に自分でうはwww俺イミフwwwwwwwwwと思っ
たwww

シリアスな話とか無理www

他の作者すげーなと改めて思った一話でしたw

ついでにゼオンの説明をポケモンぽくやってみた。

ゼオン 社長信者。

前世の魂が何者かに細工され、転生した。
特別な力を持ちあらゆる答えにパーフェクトな回答ができる。

自分が楽しければ善悪は選ばない。だが、仲間や知人を思いやる心は人一倍。
ある意味シンデレレではないかと身内に囁かれている。シンデレレのシンボルらしい。

タイプでんきノノーマル

LV255

こうげき やばい

ぼうぎょ ちょうがんじょう

すばやさ さいそく

とくこう さいきょー

とくぼう 一方通行

幸運 A＋

宝具 A＋

判断力 PC性能を凌駕する

集中力 五時間飲まず食わずにぶちぶち君を潰せる程度の集中力

持っているもの 白銀のマント 効果 ぼうぎょととくぼうが二倍になる。

性格 クールでニコ厨。たまにシンデレ。

技

パンチ

相手に強力なパンチ。

ハガネールの体を粉々に粉碎できる程度の威力。

タイプ ノーマル

威力 80 命中 100

ザケル！

ガツシユの使用頻度が最も高い術だ。電撃が相手を痺れさせるぞ。
ふざけるな！

タイプ でんき

威力 60 命中 100

追加効果 四割の確率で相手がまひる。

アッパースイング

棍棒や剣などの武器で、力任せに振り上げる。
当たるととてもいたい。

ぷーさんけるなああああ！

タイプ かくとう

威力 255 命中 95

冷符『ギガフリーズ』

所謂強化版のふぶき。

？のスペルカードでは太刀打ち不可能だ。
ちがつ、？じゃないもん！

タイプ スペルカード

威力 測定不能 命中 避けられない！！
追加効果 相手が確実に氷る

こんな感じ
WWW

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9653q/>

ポケットモンスターライトニング（仮）

2011年8月2日13時15分発行